

Kitami Institute of Technology

北見工業大学

学報

平成15年1月 事務局総務課発行 第195号

放送大学との単位互換協定調印式



(関連記事21ページに掲載)

目 次

年頭挨拶	2003年はチームワークの年に.....	3
会議報告	第26回国立大学53工学系学部長会議.....	4
	第38回国立工業大学長懇談会.....	4
	第111回国立大学協会総会及び国立大学長懇談会	5
	第6回道内国立高専校長と道内国立工業大学長との懇談会.....	6
会 議	第6回運営諮問会議の開催.....	7
入試関係	平成15年度推薦入学試験の実施.....	10
	平成15年度大学入試センター試験の実施.....	10
研究助成	平成15年度科学研究費補助金の申請状況.....	10
	平成14年度民間等との共同研究の受入状況.....	11
	平成14年度受託研究の受入状況.....	11
	平成14年度奨学寄附金の受入状況.....	11
人 事	住所変更等、海外渡航.....	13
寄 稿	私が見たドイツ.....	14
国際交流	2002年日本留学生フェア参加報告.....	19
	大韓民国三陟（サムチョク）大学校からの訪問団が来学.....	20
諸 報	放送大学との単位互換協定調印式.....	21
	国立大学法人会計基準セミナーの実施.....	21
	北見工業大学永年勤務者表彰式.....	22
	FDワークショップ及び講演会の開催.....	23
	外国人研究者の受入れ.....	23
規 程	北見工業大学タスクフォース設置要項.....	24
日 誌	11月・12月	

*住所変更等については、1月14日まで掲載しました。

＝年頭挨拶＝

2003年はチームワークの年に

学長 常 本 秀 幸

平成15年、新しい年を迎えました。時間の刻みは12月31日の一日も1月1日の一日も物理的には同じ一日ですが、年の変わり目の一日は新鮮で、何か期待を持って迎えることが出来ます。

昨年は、政治、経済、社会いずれも最悪の状況で、事例を示すまでもありません。数少ない吉報はワールドカップを中心としたスポーツと、小柴・田中さんのノーベル賞受賞の文化面だけでした。新しい年がどうなるかは予測出来ませんが、政治が大きく動くこと、経済の再生力はまだ期待できないこと、社会面では倫理感の欠如等の問題が続くであろうことは推察でき、まだ明るさが取り戻せないように思えます。

このような日本の現状を打開する力が今大学に求められていますし、それに応えることが大学の存在感を示すチャンスだと思えます。大学はそれぞれの専門性を生かして教育、研究、社会貢献に努力しておりますが、誰かがやるのではと思っていると、結局は大きな力とはならず、今の大学評価から抜け出すことは出来ません。これからの大学が日本の力、地域の力として認められるには、「個人」に頼る時代から「チームワーク」で挑戦する時代になると考えています。

私の尊敬する先輩で、日本にシステム工学という分野を広げた竹村伸一という先生がおります。日立製作所の重役から大学の先生に転身し、北大及び東京理科大でシステム工学を担当されました。この先生の本の最初に「システム」の定義が書かれています。それは「個々のベストは全体のベストではない」といった内容から始まります。私は企業時代にレース用エンジンの開発に従事しましたが、パワーのでるエンジンを作るためには多くの要素開発が必要で、多くのエンジニアが研究を重ね目標に向かって努力します。しかし、一部で素晴らしい開発があっても、それを生かすように全体が協力しなけれ

ば大きなパワーにはなりません。先日もTVでトヨタ自動車がF1に挑戦している番組がありましたが、一流のドライバー、一流のメカニック、一流の設計者等を擁し、500億円近い投資をしても勝利を掴むことが出来ませんでした。まさに、個々のベストを全体のベストにするシステムが鍵を握っていると言えます。

これまでの大学は、「個々」の成果を集めて大学のパワーとしてきましたが、これからの大学、特に地方大学は「チーム」のパワーで勝負する必要があると思っています。本学の特徴的、先端的あるいは地域性のある研究に「チームを作って挑戦」するよう検討したいと思っています。ノーベル賞をもらった田中さんが、この賞は私一人に与えられたのではなく、このプロジェクトを支援してくれた「チーム」に与えられたと言っています。一人の能力には限界がありますが、目標を明確にしたチームは強い力になります。

本年は、大学法人化に向け最終的な計画を作成する重要な年になります。大胆な改革が求められていますが、これまでの理論を振り返ると保守的な面が出てきています。できない理由を探すのではなく、マイナス面を克服してプラス面を拡大する議論が求められています。この法人化への対応は、教職員全体が一つのチームとして問題意識を持ち将来の大学作りに参画してこそ成功すると思っています。学長就任の挨拶でも引用いたしました、ケネディの就任演説にあったように、「自分が自分の大学のために何が出来るか」を考えてもらいたいと思います。



私もピンチをチャンスと捉え、大学の発展のため全力で挑戦いたします。皆様のご健闘と活躍

そしてご協力に期待し新年の挨拶といたします。

＝会議報告＝

第26回国立大学53工学系学部長会議

平成14年10月3日・4日

当番大学：熊本大学工学部

出席者：鮎田副学長

議事に先立ち、文部科学省から平成15年度概算要求の主要事項の概要について説明があった。各事項の要求の要旨と内容について考え方や特徴が示されたが、特に21世紀COEプログラム、専門大学院の充実、国立大学の地域貢献の促進などの要求額が増加されていることのほか、平成15年10月の統合に合意した20大学に対する予算も要求しているとの説明があった。

引き続き、議事に入り以下のような協議・提案があった。

協議事項について

1) 大学評価について

前回からの継続審議事項であったが、平成14年5月17日に開催された第52回国立大学工学部長会議・総会において、同様の事項が要望事項として取り上げられたため、本総会での協議は省略することとなった。

2) 入学者の学力低下への対応について

大分大学から各大学における対応・工夫等について意見交換したい旨の提案があり、信州大学から数学・物理・化学を、京都工芸繊維大学繊維学部から物理をコース別に分けて授業を行っていること、埼玉大学、熊本大学から工学基礎教育センターを学内措置として設けて定年退職者を教師とするなどして教官の負担を軽くする形で基礎学力の充実を図っているとの事例等が報告された。

3) 独立行政法人化後の対応について

熊本大学から法人化後の本会議の在り方について協議したい旨の提案があり、大学院博士後期課程を持たない大学を構成員として昭和50年代に発足した本会議の共通テーマである博士後期課程が各大学に設置されたことなどから、春の工学部長会議への一本化などの意見がだされ、次回会議で結論を出すこととなった。

以上のほか、要望事項として富山大学から大学教育研究支援体制の充実強化のためのポスト・ドクトラル・フェローシップの拡充整備、長岡技術科学大学から留学生受入方策の拡充について提案があり了承された。

また、福井大学が学内予算の傾斜配分について事前に各大学に承合した結果が示され、未検討の3大学(山形大学、埼玉大学、富山大学)、検討中の2大学(山梨大学、九州芸術工科大学)を除いて大学あるいは学部で何らかの形で実施していることが明らかにされた。

第38回国立工業大学長懇談会

全国工業系大学12校で実施している懇談会が、平成14年10月8日に東京工業大学が当番で開催された。議題は法人化をにらんだ再編計画についてであるが、概要は以下のとおりである。

- 1) 協議事項の提案校である豊橋技術科学大学から、再編の取り組みについて次のような紹介があった。現在8学科で2,000人の教育を行なっているが、学生の人気、就職状況を想定して再編計画を進めている。学部はコース制とし大学院を技術科学研究科と技術創生研究科とする。教官の組織は大学院に置くような方式について検討している。

- 2) 当番校の東京工業大学からも検討状況などが紹介された。まず大学活性化のために、教官と事務が一体化した「研究戦略室」、「評価室」、「国際室」を立ち上げ、これによって部局の壁を越えた検討が可能となった。また、4月から東京工業大学、東京医科歯科大学、一橋大学、お茶の水女子大学との連合組織がスタートし、複合領域の教育コースが開設されている。
- 3) その後各大学から現状報告があったがその中で注目すべき部分を列挙する。
- 電気通信大学：360人の教官の内20人が欠員、このうち6人は学長のもとで利用（学長補佐室に外部者を入れる。広報、国際関連で採用）
- 長岡技術科学大学：大学院の改組を行なう。修士は教育を中心とする。
- 九州工業大学：学長裁量定員として欠員の20%を使う。
- 京都工芸繊維大学：ISO14001を目指す。
- 名古屋工業大学：教官は学科から分離。学外から学長補佐2名を任命。人事室で欠員の有効活用を検討。30人で構成する運営協議会で基本事項の決定。

第111回国立大学協会総会及び 国立大学長懇談会報告

平成14年11月13日・14日に開催された国大協総会および国立大学長懇談会では、法人化に関連した議題等を中心に以下のような審議が行われた。

1. 新しい連合組織について

国大協は、平成16年3月をもって解散し、「新国立大学協会（仮称）」に引き継ぐが、この組織の細部に関する検討は「新国立大学協会（仮称）設立準備委員会」で行い、平成15年秋の総会に全体像を提示するとして提案が承認された。

新国大協は、内部審議機関に副学長などの専門性の高い委員を任命し、機能的な組織とするとともに、国立大学法人の充実・発展を支援す

る活動を目指すことになる。

2. 事務系職員の採用について

平成16年度の採用試験は現行の制度を準用するが、平成17年度の採用からは、新国大協が母体となって実施できるよう検討することとなった。

3. 平成16年以降の入試について

1) 平成16年度より5教科7科目の受験体制となるが、この方式は平成17年度も継続することが承認された。

2) 平成18年度から新課程に対応した入試を行うが、文科省から要請のあった英語のリスニングテストについて、次のような条件が整えばセンター試験は全て高校を会場として2日間で実施する方向で検討するとして提案が承認された。

① 高校の全面的な協力が得られること

現在、高校長会議は了解しているが、現場の状況が明確でない。

② 各大学にアンケート調査を行い、問題点等があればその解決等の対応は個々に文科省が行うこと

会場の格差、問題が起きたときの責任、機器の管理などまだ課題が残っている。

4. 当面する法人化問題

1) 法人化特別委員会の検討状況

これまで9回の特別委員会において、国大協の立場から文科省の原案に意見を述べてきた。その結果、人事制度及び財務会計についてはガイドラインがほぼ出来上がった。法制化については、国大協としての意見を十分反映させたいと考えているが、最終的には財務省、法制局などとの協議によって決まる事項になっている。しかし、今後とも情報の収集と提供を続けるとともに、各大学の問題点などの把握に努めるとの説明があった。

2) 法人化の日程等について（文科省清水審議官から説明）

法人化は目的でなく「大学活性化」のための手段であり、国が「幹」を作って、大学が「枝」を張って「葉」を付けてほしいとの主旨の要望があった。

① 今後の法人化のスケジュールが提示された

が、これまでの情報よりさらに詳細になっている。なお、法案提出（14年12月）が第1ステージ、法案成立（15年5月）が第2ステージ、大学評価委員会の発足（15年10月）が第3ステージ、法人化移行（16年4月）が第4ステージとなる。それに向かって各大学とも準備を進めてほしいとの要請があった。

- ② 法人化の骨格となる中期目標・中期計画の原案、運営費交付金の積算方法についての原案が出され、今後法人化特別委員会と協議を行い決定することになる。なお、中期目標・計画の記載事項については、文科省案が12月末には提案されることになる。今回提示された中期目標・中期計画の記載項目は、14年3月に示されていた例示とはかなり異なったものとなっており、各大学とも戸惑いがあったが、特にそれについての質疑はなかった。
- ③ 運営組織、評価の流れ、人事システムの検討状況についての骨格が示された。役員の名称、常勤・非常勤問題などは固まっていない部分が多い。

上記の内容について若干質疑等あったが、特に注目に値するものはなかった。

引き続き国立大学長懇談会が開催され、文科省から次のような説明等があった。

1. 遠山文部科学大臣談話
 - 1) ノーベル省について：日本の科学技術の高さを示すものである。
 - 2) 法人化：大改革に向けて加速してほしい。
 - 3) 再編統合：知のフロンティアを目指す。教員養成系は力量のある人材輩出を目指す。
 - 4) 知の拠点：高度専門職業人養成、産学官の推進、教育・研究 COE などで対応する。
2. 高等教育局長談話
 - 1) 法人化
 - ・ 自立性を高めることは自由度が増すが責任も大きくなる。旧から新への移行時の不満と混乱を最小限にするよう努力する。
 - ・ 運営交付金は学生数のみで積算するのではなく、センターなどは別途対応する。
 - ・ 教職員の意識改革、中期目標などについて検

討を進めてほしい。

- 2) 再編統合
 - ・ 教員養成系の統合は住民の反対で進展していない。あせらずあきらめず。
 - ・ 2、3流のデパートになるのではなく専門店を目指す。
 - ・ 教員養成と獣医系の再編統合は避けられない。
- 3) COE：No.1、Only one を目指す組織作りを期待する。
- 4) 専門職大学院：高度専門職業人養成という目的を明確化し、特化する。
- 5) 戦略性：法人化を見据えながら戦略性を高めてほしい。
- 6) 地財法の変更：11月から地財法が変更になり、条件が整えば地方公共団体からの寄付が可能になった。

第6回道内国立高専校長と 道内国立工業大学長との懇談会

平成14年12月6日の道内国立工業高等専門学校長との懇談会で次の議題について話し合いがもたれた。

1) 専攻科の設置状況について

国立54高専のうち、平成15年度設置予定5校を含めると44校に専攻科が設置される。北海道は平成15年度苫小牧高専に設置の予定であり、旭川高専について道内2番目となる。なお、平成16年度に函館、17年度に釧路と設置が進む予定である。

各高専の専攻科定員は20人程度であり道内全体で80人程度となるが、最近専攻科への進学者の上昇に刺激され、編入学希望も増加しており各高専で編入学を含めた進学予定者は30%程度（200人程度）になるものと予想している。従って、道内国立大学の合計60人の定員が専攻科によって欠員になるようなことはないとの見解であった。

2) 各大学における法人化の準備状況と高専法人化について

国大協で示された法人化の骨格と、本学および室蘭工業大学の取り組みについて照会があった。一方、高専の法人化についても現状が紹介されたが、大学と同様に平成16年4月を目途にしているとのことである。なお、全国1法人あるいはブロック1法人などの議論がされているのが現状のようである。

3) 地域連携の現状について

各高専とも地域連携のための協議会を設けて

進めているが、地域格差が大きい。苫小牧は商工会議所などが積極的な対応をしている反面、旭川では不況の関連もあって協力体制が十分でないとの報告があった。

室蘭工業大学は人口の激減に伴って、市の将来像への貢献を摸索しているが、環境産業の推進に関して検討しているとの説明があった。本学は寒冷地工学を中心に進めていることを説明した。

＝会議＝

第6回運営諮問会議の開催

(総務課)

去る12月13日(金)本学第一会議室において第6回運営諮問会議が開催されました。今回の会議では、前回行われた第5回本会議で諮問された「法人化に向けた本学のあり方」のうち「その後の法人化の動向及び研究・国際交流に関する中期目標・中期計画」について活発な意見交換が行われました。

会議要録は以下のとおり

第6回北見工業大学運営諮問会議要録

出席者 五十嵐 力 五十嵐建設(株)代表取締役
熊谷 秀男 東京電波(株)代表取締役社長
小林 護 野村興産(株)イトム力鉱業所
常務取締役所長
丹保 憲仁 放送大学長
戸田 一夫 北海道電力(株)取締役相談役
吉村 宣夫 北見工業大学同窓会長

欠席者 神田 孝次 北見市長
五島 哲 東京急行電鉄(株)取締役調査役
高橋はるみ 北海道経済産業局長
森本 正夫 北海学園北見大学長

会議開催にあたり、学長からの挨拶の後、運営諮問会議委員及び本学関係者の紹介があった。引き続き、丹保会長が議長となり審議が進められた。

会議概要

1 第5回北見工業大学運営諮問会議のまとめについて

事務局から、第5回北見工業大学運営諮問会議まとめの朗読があり、確認された。

2 法人化に向けた本学のあり方について (1) 法人化の動向

常本学長から説明の後、種々意見交換が行われた。

主な意見(大学説明)

組織が小さな大学にとって法人化への対応は、大変な苦勞が予測される。

今まで学長の権限が曖昧で弱かったが、任命権が一元化することで強いリーダーシップが期待できる。反面、責任も重大となる。

逆に学長の権限が強化され独裁化になってしまふ可能性があるのではないか。

非公務員型となると労働組合が存在してくるのか。

労働者の過半数で組織する労働組合又は労働者の過半数を代表する者の意見聴取を行い、労使協定を締結することとなる。

現在の国立大学には当事者能力のある組合が存在しないし、労使協定を締結することに対しては双方とも不慣れなため、今後、多くの問題が発生してくる可能性がある。

中期目標・中期計画については、最初の期間である6年が経過した後の評価結果により運営費交付金等へ反映されることから次のサイクルが最も重要と感じられ、大学の生き残りにも関連してくるよう思える。

運営費交付金については、今のところ年5%の削減があると聞いている。人件費が膨らむと研究費が減ることとなる。

法人化は大学の活性化のためには最も即効性が取れる形態に感じられる。

今度は倒産もあり得るということを意識として持たないといけない。

今度は学長が知らないことはなくなるので責任の所在がはっきりし、厳しい立場におかれることとなる。

学長は研究業績があり、人格が高潔で経営能力に優れている者が選考の基準となる予定である。

重要事項は役員会で議決することとなるが、北見工大の場合も役員会、運営協議会、評議会の議長は学長になると予想され、現在の教授会の位置付け、権限をどのようにするのが大変重要である。教授会の意見をどこまで反映するのか、また、拒否した場合の説明等大きな問題である。

副学長の体制は決まっているのか。

副学長は兼務とならない予定である。学外からの副学長は非常勤となる可能性もある。事務局長制はなくなり副学長になるのではないか。

一つの特徴として、理系と文系で授業料が異

なる大学や聴講する科目で授業料を取る大学も出てくる可能性がある。

単科大学は2学部、3学部からなる総合大学を抜く可能性があるし、私、公、国での連合大学院の設置も可能となる。

社会人入学や入学時期など地域の要望に応えるように検討を進めてほしい。

地方財政再建促進特別措置法施行令の一部が改正され、地方公共団体からの寄付金等について要件が緩和されたことにより、地方公共団体とも情報交換等を行い地域経済の活性化や地方自治体との連携強化を図っていきたい。

(2) 研究に関する中期目標・中期計画

鮎田副学長から説明の後、種々意見交換が行われた。

主な意見(大学説明)

平成14年度の21世紀 COE プログラムには申請したのか。

申請したがヒアリングまで行かなかった。もっと特化したものを検討すべきとの指摘を受けた。

今回採択された内容を見ると旧帝大や早稲田、慶応にパワーがあったように感じられたが、将来的にはどうなのかわからない。また、小さな大学も健闘しているように思えたので、北見工大も特徴を出してやっていただきたい。現時点で重点化すべきはどの分野なのかを見極めて、研究を絞り込むべきである。

4分野、5分野すべてを重点化するのは、大学の規模からして無理がある。

1分野で名を上げないと学生も来なくなる。現在は無駄な労力を使いすぎている。教授会等学内のいろいろな面を精査してもっと教育、研究に時間を割けるように配慮してほしい。是非COEプログラムが採択されるよう努力してほしい。

(3) 国際交流に関する中期目標・中期計画

高橋副学長から説明の後、種々意見交換が行われた。

主な意見（ 大学説明）

慶尚大学校との交流はどのような内容だったのか。

1週間ホームステイをして文化や産業の講義を聴講した。研究者との交流も行った。

経費はどのようにしたのか。

全額は大学として負担できないので学生後援会から補助していただいた。

学生の派遣に係る経費は全体でどのくらいなのか。

150万円位である。

国際交流研究センターを設置した場合、事務の一元化はどのように行うのか。

現在は分散している事務をより適切に対応できる組織にしたいと考えている。

留学経験のある英語のできる事務官はいるのか。

現在はいない。

事務官の留学は行っているのか。

行っていない。

法人化は良い機会なので、事務官が国際化に対応できるようにしてはどうか。長期の留学は特に語学の修得に関し大変効果があるので、不在の間の業務をできる限り大学としてバックアップしてほしい。

以上、意見交換の後、議長から、本日の会議のまとめについては、会長、副会長に一任願、次回の本会議で確認することで御了承願いたい旨発言があり、審議が終了した。

審議終了後、学長から謝辞が述べられ閉会した。

＝入試＝

(入学主幹)

平成15年度推薦入学試験の実施

平成15年度推薦入学試験は、小論文及び面接による選抜が12月6日(金)に実施され、12月18日(水)に合格発表が行われました。

各学科別の合格者等については下表のとおりです。

学 科 名	募集人員	志願者	合格者
機械システム工学科	12	21	12
電気電子工学科	8	17	11
情報システム工学科	12	27	15
化学システム工学科	12	12	11
機能材料工学科	6	3	3
土木開発工学科	12	14	13
計	62	94	65

平成15年度大学入試センター試験の実施

平成15年度大学入試センター試験が、1月18日(土)、19日(日)の両日実施されました。

本学会場の志願者は昨年度より47人減の741人となりました。

＝研究助成＝

平成15年度科学研究費補助金の申請状況

(総務課)

研究種目等	機械システム		電気電子		情報システム		化学システム		機能材料		土木開発		共通講座		センター等		合計		
	件	千円	件	千円	件	千円	件	千円	件	千円	件	千円	件	千円	件	千円	件	千円	
特別推進研究																			
特定領域研究(計画)							2	24,150				2							24,150
特定領域研究(公募)																			
基盤研究(S)																			
基盤研究A(一般)	1	17,150			1				19,900				2						37,050
基盤研究A(海外学術調査)															(1):13,600	(1):13,600			(1):13,600
基盤研究B(一般)	3	12,200	(1):2,400 2 13,248	(1):4,300 4 19,368			1	10,200	(1):3,500 3 17,345		4	18,162	(1):2,800 1 2,800						(4):13,000 18 93,323
基盤研究B(海外学術調査)							(1):1,800 1 1,800				1	5,550	1	3,500	1	2,300			(1):1,800 4 13,150
基盤研究C(一般)	(2):1,900 17 37,170	(1):500 11 27,367	(3):3,400 9 17,737	(2):1,500 10 25,108	(1):1,000 7 18,341	(3):2,800 11 21,995						4	6,716			2	5,010		(12):11,100 71 159,444
基盤研究C(企画調査)				1	4,295				1		5,000					2			9,295
萌芽研究	2	5,340			5	9,843	2	5,590	1	1,345			2	3,632	1	2,500	13	28,250	
若手研究(A)																			
若手研究(B)	2	4,515	3	7,095	(2):1,900 8 17,160	(1):800 3 6,153			2	4,566	1	1,340	(1):800 1 800	(1):300 2 4,467	(1):300 2 4,467	(5):3,800 22 46,096			(5):3,800 22 46,096
計	(2):1,900 25 76,375	(2):2,900 16 47,710	(6):9,600 27 68,403	(4):4,100 19 73,001	(2):4,500 14 61,497	(3):2,800 18 52,047	(2):3,600 9 17,448	(2):13,900 7 27,877	(23):43,300 135 424,358										

備考 1 上段()内は継続課題で内数 2 金額は平成15年度申請(内約)額

平成14年民間等との共同研究の受入状況

(総務課)

所 属	職 名	研究代表者	研 究 題 目	民間機関等名
機械システム工学科	教 授	富士 明良	凍結道路面の滑り止め用生分解性プラスチックピリ砂利の開発	(財)北海道科学技術総合振興センター
情報システム工学科	助教授	吉田 秀樹	寒冷気候の発声へ及ぼす影響評価のためのシステム開発	(財)北海道科学技術総合振興センター
情報システム工学科	講 師	後藤文太郎	インターネット技術の動向とその応用	北 見 市
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	新型硬化促進剤の研究	日産化学工業(株)
電気電子工学科	助教授	柏 達也	大型計算機を使った車載アンテナ特性に関する研究	(株)本田技術研究所 栃木研究所
機械システム工学科	助教授	山田 貴延	エンジン用燃費向上機器と同添加剤に関する試験研究	太平洋建設工業(株)

平成14年度累計 73件

平成14年度受託研究の受入状況

(会計課)

所 属	職 名	研究担当者	研究題目及び研究期間	委託機関	所要経費
機能材料工学科	教 授	高橋 信夫	「メタンハイドレートを利用した下水道消化ガスの高カロリー化技術開発」に必要な調査 平成14年11月～平成15年3月	三井造船(株)	円 4,200,000

平成14年度累計 14件

平成14年度奨学寄附金の受入状況

(会計課)

所 属	職 名	研 究 者	寄 附 目 的	寄 附 者	寄附金額
電気電子工学科	助教授	平山 浩一	「マイクロ波シミュレータ開発」に対する研究助成	(株)サジロー	円 100,000
化学システム工学科	助教授	伊藤 純一	「ゴルフ場開発による女満別川水質調査・研究」に対する研究助成	北海道指導漁業協同組合連合会	1,000,000
化学システム工学科	助教授	伊藤 純一	「ゴルフ場開発による常呂川水質調査・研究」に対する研究助成	北海道指導漁業協同組合連合会	500,000
機械システム工学科	教 授	二俣 正美	「工学研究」に対する研究助成	大阪ガス(株)	1,000,000
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	「工学研究」に対する研究助成	太平洋セメント(株)	500,000
機能材料工学科	助教授	阿部 良夫	「セラミック材料の研究」に対する研究助成	京セラ(株) 通信デバイス事業部	500,000

所 属	職 名	研 究 者	寄 附 目 的	寄 附 者	寄附金額 円
情報システム工学科	助 手	原田 建治	「工学研究」に対する研究助成	原田 建治	100,000
電気電子工学科	助教授	菅原 宣義	「ロードヒーティング関連製品の開発」に対する研究助成	三菱電線工業(株)	700,000
機械システム工学科	助教授	閻 紀旺	「工学研究」に対する研究助成	(財)三豊科学技術振興協会	2,450,000
電気電子工学科	助教授	平山 浩一	「誘電率測定法に関する研究」に対する研究助成	(株)関東電子応用開発	300,000
化学システム工学科	助教授	伊藤 純一	「ゴルフ場開発による常呂川水質調査・研究」に対する研究助成	北海道指導漁業協同組合連合会	500,000
地域共同研究センター	センター長	鈴木 輝之	「コーディネート活動支援」に対する助成	地域共同研究センター推進協議会	250,000
地域共同研究センター	センター長	鈴木 輝之	「コーディネート活動支援」に対する助成	全国中小企業団体中央会	1,800,000
化学システム工学科	助教授	伊藤 純一	「環境科学研究」に対する研究助成	(株)北開水工コンサルタント	600,000
留学生教育相談室	教 授	山岸 喬	「オホーツクの原料を使用した保健食品の開発」に対する研究助成	(株)福地工業	100,000
地域共同研究センター	教 授	斎藤 俊彦	「ベンチャービジネスの研究」に対する研究助成	(株)福地工業	100,000
土木開発工学科	教 授	大島 俊之	「構造物診断技術に関する研究」に対する研究助成	(有)アミューズ	300,000
地域共同研究センター	センター長	鈴木 輝之	「オホーツク地域の行政・民間機関との共同研究・研究交流及び技術指導、教育、開発等の推進」助成	地域共同研究センター推進協議会	340,000
土木開発工学科	教 授	大島 俊之	「橋梁維持管理システムの構築」に対する研究助成	(株)ドーコン	1,050,000
化学システム工学科	教 授	多田 旭男	「メタン分解触媒開発」に対する研究助成	鹿島建設(株)技術研究所	500,000
化学システム工学科	教 授	鈴木 勉	「化学システム工学科における教育研究」に対する助成	(株)荏原製作所	200,000
土木開発工学科	教 授	大島 俊之	「土木構造物の設計技術開発」に対する研究助成	太平洋総合コンサルタント(株)	300,000
土木開発工学科	助教授	高橋 清	「小規模物流の効率化に関する研究」に対する研究助成	(社)北海道開発技術センター	2,000,000
化学システム工学科	教 授	多田 旭男	「スーパーソルを基材とする電磁波吸収体の研究」に対する研究助成	藤建工業(株)	200,000

平成14年度累計 80件

=人事=

海 外 渡 航

○外国出張

所 属	職 名	氏 名	渡 航 目 的 及 び 渡 航 先 国	期 間
情報システム工学科	助 手	原 田 建 治	IEEE Lasers and Electro-Optics Society 国際会議出席及び研究発表 (スコットランド)	14 .11 .9 ~ 14 .11 .15
機械システム工学科	助 教 授	閻 紀 旺	第 5 回先端砥粒加工技術に関する国際シンポジウム出席及び研究発表 (中華人民共和国)	14 .11 .14 ~ 14 .11 .19
土木開発工学科	教 授	海老江 邦 雄	第 4 回日中国際ろ過分離会議出席及び研究発表 (中華人民共和国)	14 .11 .17 ~ 14 .11 .22
情報処理センター	助 教 授	青 山 茂 義	国際会議「不安定核の物理」出席及び研究発表 (ベトナム社会主義共和国)	14 .11 .18 ~ 14 .11 .26
化学システム工学科	教 授	鈴 木 勉	国際学会 International Symposium on Biotechnology, Metal Complexes and Catalysis 出席 (中華人民共和国)	14 .11 .22 ~ 14 .11 .30
化学システム工学科	助 教 授	堀 内 淳 一	第 2 回日中化学工学シンポジウム出席及び講演 (中華人民共和国)	14 .11 .27 ~ 14 .11 .30
土木開発工学科	助 教 授	亀 田 貴 雄	第44次南極地域観測隊に参加(南極地域)	14 .11 .28 ~ 16 3 .27
情報システム工学科	教 授	藤 原 祥 隆	教育におけるコンピュータに関する国際会議2002年にて論文発表、討論並びに関連技術調査 (ニュージーランド)	14 .12 .1 ~ 14 .12 .8
共 通 講 座	教 授	照 井 日 出 喜	フンボルト大学にてフランクフルト学派の批判理論に関する研究打合せ及び文献資料収集 (ドイツ連邦共和国)	14 .12 .15 ~ 15 .1 .15

○海外研修

所 属	職 名	氏 名	渡 航 目 的 及 び 渡 航 先 国	期 間
土木開発工学科	教 授	檀 本 浩 之	International Workshop on Grlobal Change 参加、発表。将来研究計画検討会議参加 (アメリカ合衆国)	14 .11 .3 ~ 14 .11 .8
機械システム工学科	教 授	田 牧 純 一	第 5 回国際砥粒加工シンポジウム出席及び論文発表、工場見学(中華人民共和国)	14 .11 .15 ~ 14 .11 .19

＝寄稿＝

私が見たドイツ

機能材料工学科 川村みどり

私は平成13年11月から1年間、文部科学省在外研究員としてドイツ、ユーリッヒ研究所に滞在しました。その間の体験及び「私が見たドイツ」を報告致します。

1. ユーリッヒの町及びその近郊の街について

ユーリッヒは人口3万人弱のドイツ西部の小さな田舎町で、デパートも映画館もなく、北見のほうずっと都会です。しかし町の歴史はローマ時代にさかのぼるほど古く、ルネッサンス時代からの建物が残っていたり、ナポレオンとプロシア軍の古戦場もありました。町に士官学校があったため、第二次世界大戦中、連合軍から攻撃を受け、ユーリッヒは壊滅状態になりましたが、1956年に研究所が創立され、町の復興が加速されました。主な産業としては、製糖工場があり、秋冬のシーズンにはビートを満載したトラックが街中を頻繁に走っています。町の外れには研究所があり、さらに数キロほど離れると石炭の露天掘りが数箇所で行われています。

気候はドイツの中でも温暖な地域で、降雪も3日しかありませんでした。しかし、曇天が多く、北見のようにカラッと晴れ上がる日はあまりありませんでした。夏も暑い日は数日で、比較的涼しい日が多かったです。変わりやすい天気です。激しい雨が降ってもしばらく待てば晴れ上がる事が良くありました。

近くの街としては、ベルギー、オランダとの国境（写真1）にアーヘンという歴史的に重要な町（かつてフランク王国の首都であった）があり、その大聖堂は世界遺産に指定されています。また東側にはライン川に沿って、ボン、ケルン、デュッセルドルフと言った大きな街があります。いずれも50km程離れています。また国境を挟んでベルギー側にはリエージュが、オランダ側にはマーストリヒトといった大きな街があります。ボンは10年前まで西ドイツの首都



写真1. アーヘンの3重点（オランダ、ベルギーとの国境にて他の観光客と）

でしたが、鉄道の駅などは小さな町のバスターミナル程度のこじんまりとしたもので、とても首都だったとは思えません。ベートーベンの生家があり、日本人観光客が多数訪れています。ケルンは大聖堂が有名で、数年前にサミットも行われました。ドイツ国内の観光客数はここが第一位です。ケルン大聖堂はとにかく巨大な建造物で、そびえたっている、と言う表現が当てはまるかもしれません。第二次世界大戦の爆撃で外観が黒く煤けてしまったそうです。昔からリベラルな風土の街で、芸術活動も盛んで、立派なコンサートホールやオペラハウスがありました。デュッセルドルフはビジネスの街で、日本企業のドイツの拠点でもあるため、日本人が多く、日本人学校もあります。私は行きませんが日本食のレストラン、食材店、和雑誌を置く書店等も揃っています。日本の雑誌等も空輸されており、値段は倍になりますが発売後すぐに手に入るようです。

ユーリッヒにはドイツ鉄道の路線がなく、ローカル線の駅しかないため、交通の便が悪く、これらの街にでかけるのも結構時間がかかりました。ここから首都ベルリンまでは600kmもあり、むしろ隣国の首都の方が距離的には近いと

言う状況は、島国に住んでいる日本人には面白かったです。通貨もユーロ（ドイツ語では「オイロ」）に統一され、本当にヨーロッパは一つの共同体になりつつあると実感しました。

2. ユーリッヒ研究所(FZJ)での研究生生活

滞在していた研究所は特に原子力分野で世界的に有名で、今も実験用原子炉が稼動しています。現在は材料、バイオ等様々な分野の研究が行われており、広大な敷地の中に39の Institutes があり従業員数4200人、内、研究者数1100人、外国からの客員研究者が年間700人にも上ります。そのため、外国人の受け入れ態勢が整っており、住民登録、ヴィザの取得等も研究所内の外国人担当課で代行してくれるので私は直接役所に出向く必要はありませんでした。研究所には400人のドクターの学生がいますが、彼らは3年間の契約社員でその間に関連の大学（例えばアーヘン工科大学など）のドクターコースに在籍し、学位を取得する仕組みになっています。ドイツでも学生のドクター進学率の低下が問題となっており、私の周囲でも外国人学生ばかりでした。パーマネントの研究者の中にも外国人がいて、彼らは母国からの学生を採用するケースが多いようでした。やはりコミュニケーション上のメリットが大きいのだと思います。

日本人研究者も20名近くいて、私のような短期のケースや、ポスドクとして数年滞在している人等様々でした。他には場所柄東欧（ブルガリア、チェコ、ポーランド等）西欧、ロシア、インド、中国等から多く集まってきていました。イタリア、フランスから来ている人たちは同じEU圏内ということで、パスポートも持たずに来ていました。

研究所のゲストハウスで外国人社員とその家族のためのドイツ語講座がありました。入門から4レベルあり、それぞれ週2回の授業でした。このクラスでもロシア人と中国人が多かったです。東欧の人達は、言語的に類似しているのですが、上達が早く感心しました。このクラスで知り合った友人たちとはそれ以外でも良く集まったり、一緒に出かけたりと楽しい思い出

ができました。彼らと話していて、印象に残っているのはドイツに来たことによって給料が7倍になったと言っていたことです。また何人もの人達がもう二度と自分の国には帰らない、と断言していたことです。これは恵まれた環境で暮らしてきていた私にはショックでした。根本的にハングリー精神が違うということを感じ、そして国際社会での競争とは、こういう人達と競争するということなのだ、と認識しました。

私は薄膜・界面研究所の中のB.Voigtlaender博士の研究室に滞在しました。彼は教授になる資格を取得しており、アーヘン工科大学へ講義に出かけていました。非常に物理教育に熱心で、子供達や高校の先生方を対象としたプログラムでも講演するなど、多忙な日々を送っていました。私は同研究室で半導体薄膜を分子線エピタキシー(MBE)法で堆積させて走査型トンネル顕微鏡(STM)でその表面のナノ構造を観察する研究に従事していました。実験上のトラブルはドイツ人のテクニシャンがサポートする仕組みになっていました。研究室には私の滞在期間中ももう一人の日本人研究者(日本原子力研究所所属)、ロシア人とチェコ人のポスドク、ロシア人、インド人ドクターの学生が所属していました。次々と人が集まってきて、非常にアクティブな研究室でした。

この研究所はビートル型といわれるSTM(現在、ユーリッヒモデルと言われている)を開発した所です。実験装置は付属の機械工場に設計図を出して、全て自前で組み立てていました。このほかに電子工学部門があり、電源の類も自給できるようになっていました。研究支援体制が整っている点は羨ましい環境でした。その他にも、電子ジャーナルが自由に閲覧できる環境が整備されており、INSPECによる検索等も活用できました。

日本に比べて安全教育が徹底しており、パンフレットを読むだけでなく、講習への参加も義務付けられていました。緊急時の連絡体制も整っていて、全ての電話に建物番号、部屋番号、最寄の玄関番号が記されたシールが貼られ、緊急時に正確に情報を伝えられるように工夫され

ていました。正規の時間外での実験は表向き禁止されていて、実際、土日に仕事に行くのは外国人で、ドイツ人のスタッフはほとんどみかけませんでした。一度日曜に、改修中の建物の天井から大規模な雨漏りが発生しているのを発見して、感謝されたことがありました。

職場で誕生パーティーが度々ありましたが、ドイツの習慣で、誕生日を迎えた本人が主催するという形式には多少違和感を覚えました。まあ、一年に一度だけ準備をすればよいので合理的ともいえます。ここでも男性も手作りケーキを持参してきたので驚きましたが、子供の時、母親から1種類だけは作れるように教えられたそうです。私も帰国前、ドイツ式に送別会を自分で準備して開きました。(写真2)



写真2. 研究室でのパーティー

3. ドイツでの生活全般について

ドイツの町の中心部は大抵、教会と市庁舎がマーケット広場を挟んで対峙する構造です。町のお祭りにはマーケット広場を中心に出店が並び、賑やかになります。カトリック色の強い地域だったので、立派な教会が沢山あり、2月のカーニバルも盛大に行われ、パレード等のイベントがありました。(写真3) またクリスマス前の一ヶ月はクリスマスマーケットが開かれ、シナモン等のスパイスをいれて作るグリューワインという甘くて温かい独特の赤ワインも味わえます。これは日本の甘酒に相当するでしょうか。

週末を利用してしばしば近くの観光地に出か

けましたが、なかでも日本でも有名なライン川沿いの古城と広大なブドウ畑は素晴らしい眺めでした。モーゼル川沿いも有名な白ワインの産地で、直接試飲してからワインを購入できます。その他で印象に残った場所は、ミュンヘン郊外のダッハウという町です。ここには戦争中強制収容所があり、ユダヤ人だけでなく、ドイツ人の政治犯等も収容されていました。広大な敷地に当時の建物や、キャンプ跡が残っており、世界中から集まってきた訪問者がガイドの説明を聞きながらガス室等を見学していました。若い人達の姿が多く見られ、感心しました。

ドイツは大作曲家を数多く生み出した国ですが、本当に音楽の国だと実感しました。ユーリッヒのような町でも音楽学校がありましたし、人口が10万人程度の街でもオペラハウスがあり、定期的に公演が行われていました。一番安い席のチケットは千円程度でした。ケルンの例を挙げると、週末のみならず、平日も公演があり、午後7時か8時頃始まり、途中休憩時間もたっぷりあって、終わるのは午後11時位というのが一般的でした。田舎の町から出て行く立場としては、もっと早く開始してくれれば、と思ったものですが、ドイツは緯度が高く、夏の間は午後10時くらいまで明るいので、こういう時間の使い方ができるのだなあと思いました。オペラと言っても特別な盛装で行く人はそれほどいませんでした。もっとみんな気軽に、まるで映画を見に行くような感覚で楽しんでいるように見えました。北海道では、特に北見では無理な話



写真3. ユーリッヒのカーニバルのパレード

で本当に羨ましい環境でした。

各町にフォルクスホッホシューレという一般人向けに講座を開いている学校（カルチャースクールのようなもの）があり、語学、スポーツ、文化、芸術、料理等色々な講座が昼夜開かれています。例えば英会話ではレベル別にクラスが16ほどあり、12回のグループレッスンが5千円弱の授業料で皆気軽に受講でき、羨ましいシステムだと思いました。北見にもこのような講座があれば、本学の学生等も気軽に英会話を学ぶことができるのではないかと思いました。他にも地域柄、フランス語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、そして外国人の為のドイツ語クラスがありました。

実際に1年間住んでみて、それまで抱いていたイメージとは結構違っていたのは、まず、ドイツは車社会だという先入観があったのですが、行ってみると非常に自転車に乗っている人が多いことに驚きました。そのためか、市街地でも郊外でもサイクリングロードが良く整備されていました。職場から数キロ内に住んでいる人たちは健康のため（節約のため？）、たいてい自転車通勤していました。一つにはバスや電車の便が悪いという事情もあるのですが、雨天でも、カッパを着て自転車通勤してくるのには当初は驚きました。私も研究所から自転車を借りて、半年間自転車生活を楽しみました。何度か不便な思いもしましたが、結構快適で、休日も仲間と3時間位かけて、近くの名所に出かけたりしました。（写真4）

有名なアウトバーンですが、無料で、区間によっては制限速度がなく（全域無制限ではありません）、非常に快適です。構造的にも工夫されていて、間違えて降りかけても上手く本線に復帰できるようになっていました。私の住んでいた地域は特にアウトバーン網が縦横に張り巡らされていて便利でした。私は必要な時にレンタカーを借りて走っていましたが、本当に、ドライブ好きの人にはやめられない快適さだと思いました。また日本ではなかなか運転する機会のないヨーロッパ車を色々試すことができて楽しかったです。ただ、マニュアル車が主流なの



写真4. ハイキングで訪れた古城

で、かなり緊張して運転していました。ドイツ人はドイツの製品に誇りを持っていて、自慢話を聞かされることもありましたが、日本製品の評価も高く、特に自動車はよく見かけました。ドイツの高級車に乗っている人が次は日本車に乗りたい、と言っているのを聞いたことがあります。私の見たところ、ドイツ人が日本びいきだとは思いませんでしたが、日本製品びいきであることは確かであると思います。

またドイツ人は時間に厳しい、と思っていましたが、私の経験及び周囲の人達の感想も加えて判断すると、個人間の約束の場合は結構守るが、企業のサービスなどの場合はルーズでした。特にドイツテレコムに電話工事を依頼した時は連絡してきた日時に現れず、催促を重ねた結果その一週間後にやっと工事に来たほどで、呆れてしまいました。これは私だけでなく、ドイツ人家庭でも同じだそうです。ドイツ鉄道（DB）も列車の時刻が遅れると言うことで評判が芳しくないようです。テレビのCMで「DBの遅れは平均してたったの3分（他の手段に比べて優秀）」というのを見て信じられませんでした。日本では絶対宣伝としては使えないでしょうから。苦笑したのは、それに対してスーパーの閉店時間等はきちりと守られて、閉店10分前には奥の方から照明が消されたことです。これも初めての経験だったので、あまりの商売っ気のなさに大変驚きました。

ドイツの物価は物によって日本と同程度のものもありましたが、食料品が非常に安いことに

驚きました。例えば500mlの缶ビールはスーパーなら70円で買うことができます。チーズや生ハム、スモークサーモン等、日本では比較的高価な物が安く手に入りました。ただし流通があまりよくないのか、大きなスーパーでも生鮮食料品の鮮度はあまりよくありません。他にも牛乳パックから牛乳が漏れているのに平気で並べられている等、日本の消費者には受け入れられないだろうと思われる点も結構ありました。また海に面していない地域だったためと消費量が少ないため、魚があまり手に入らず日本人は皆口々に不満を言っていました。また調理法が違うため、スライス肉が手に入らないなどの違いがあります。ドイツらしいのはパン屋が多いことです。硬くて独特の風味のあるドイツパンは慣れると味わい深いものです。ハム、ソーセージは確かに種類が豊富で味も良かったです。

レストランで外食しても日本よりかなり安い料金で済みます。それで仕事の後やドイツ語クラスの後で、仲間とピザ屋、ギリシャ料理店、ステーキハウス等に出かけたりしました。トルコ人が多く住んでいるので、一種のファーストフードですがケバブというトルコ風サンドイッチも食べました。面白いのは清算の時、自分の飲食分だけきっちりと払う点です。日本の感覚だと、あまり細かくするのは格好悪いようにも思ったのですが、一人一人、自分は何と何を注文した、とウエイターに申告して払っていました。昼食は研究所の食堂で研究室の仲間と食べていましたが、大抵300円位で食べられました。中には骨付き豚肉のグリルやローストチキン半

羽といった日本では絶対見られないようなメニューもありました。

当初不自由だったのは、日曜日は完全に店が閉まっている点です。レストランは開いていますが、買い物は基本的にできません。土曜も夕方4時で閉店します。これは閉店法という法律で制定されているためですが、日曜日こそ、買い物に行く習慣だった私にはかなり不便でした。しかし、慣れてしまえば、どうにかなったので、逆に言うと、日本は便利すぎるのかもしれないと思いました。少なくとも24時間、開いている必要はないのでは、と思いました。全般的に日本の生活はかなりアメリカ社会に近く、ヨーロッパとのギャップが大きいと実感しました。最初は不便でも慣れてしまうと、必要最低限の物しか持たない、簡素でシンプルな生活というのも快適で、自分のこれまでの生活を見直そうと思いました。

日本のニュースはほとんど目にすることはありませんでしたが、サッカーのワールドカップが日本で開催されたため、日本を紹介する番組も見られました。特にドイツの初戦が札幌で行われたので、私も映像を見て懐かしく思いました。

最後になりましたが、貴重な機会を与えていただきました事を、学長先生をはじめとして電子材料研究室の佐々木先生、阿部先生および諸先生方に心より感謝いたします。また本在外研究でいろいろとご協力いただきました事務局の方々に厚く御礼申し上げます。



＝国際交流＝

2002年日本留学生フェア参加報告

留学生教育相談室 山岸 喬

ベトナムに熱い視線、46機関が参加

今年の留学生フェアはベトナム、タイ、韓国、中国で開催された。留学生フェアは留学希望の学生に、各大学の留学生受け入れについて説明することが目的で、毎年アジアの主要都市で開催されている。ベトナムでの開催は一昨年に続き、2回目である。今年はホーチミン市で10月29、30日に開催された。現在、日本にはベトナムから900人の留学生が来ているが、日本国際教育協会の説明によると、日本の全留学生の12%を占める程度である。今回のフェアには日本から46機関が参加した。参加機関数では韓国の65機関に次ぎ、北海道・東北地区では北海道大学、北見工業大学、弘前大学、青森中央学院大学、東北大学、岩手大学、岩手県立大学が参加していた。現在、ベトナムの留学生は少ないが、ベトナムはドイモイ政策（経済開放政策）により、中国、マレーシアの経済成長に追いつく勢いである。このような状況から、社会主義の国であるにもかかわらず、日本企業の進出が盛んであり、日本留学熱が高く、各大学も留学生の増加が期待できる国として、今回の留学生フェアに多くの大学が参加したものと思われる。



本学のブース

暑い会場で熱い交流

今回のフェアのホーチミン市の中心にあるベントラン劇場であったが、冷房なしの会場は30

を超え、そのなかでの説明は厳しいものであった。開会時間は午後1時からで、日本の感覚ではなぜ朝から開催しないのかと思ったが、通訳の学生の都合で、午後からの開催になったようである。しかし、午後からの開催は3時頃には必ずスコールがあるので、日中の暑さを避けるには都合がよかった。ベトナムの人はこのスコールの後から、外出するらしく、会場には午後6時過ぎから人が増え、夜8時まで人が絶えなかった。

一日目の来場者数は1187人、2日目が694人で合計1873人であり、狭い会場には人は絶えることがなかった。北見工業大学のブースにも多くの人に来て、高橋副学長、菊地教務課長と私の3人でも、休むこともできないほどで、夜8時まで説明会が続いた。入学案内の「ブルースカイ」の希望者への配布は200部を越えた。質問で一番多かったのが、授業料、奨学金、試験科目、授業方法の違い、学生寮についてであった。



汗だくで説明する高橋副学長

日本留学に夢見る学生

現在、ベトナムの大学の授業料は年間2万円程度、大卒の月給が2万円であるから、高額な授業料を払える人は極めて少数の人であろうと感じたが、経済成長の早いベトナムなので、これから日本留学が増えることは間違いないと感

じた。実際、日本留学して、日系企業で働くことを夢みているが、日本語を勉強している学生は多いと聞いた。通訳をしてくれたチャン・ティ・タン・ヤンさんは日本企業で秘書として働きたいと話していた。彼女は親族からお金の援助をしてもらい、まず、東京の専門学校に入学して、勉強しながらアルバイトで授業料と生活費を確保する予定であるという。日本留学に関してはホーチミン市内にあるさくら日本学校が指導してくれるようである。

現在、ベトナムの人が物価高の日本で勉強するためには、一人当たり国民総生産が190ドル（94年）のベトナム人にとっては、かなりの困難が伴うものであると感じた。このような状況でも日本に900人を超える留学生が来ていることはベトナムの留学に対する強い情熱を感じた。

雑記

ベトナムの学生は純朴で、勉学に一途であり、このような学生を本学で受け入れ、ベトナムの科学技術の振興に役に立てたいものと思った。しかし、経済力の弱いベトナム学生の受け入れには、寮や奨学金制度の充実が必要であると感じた。

留学生フェアの開催地のホーチミン市はベトナムの経済の中心地で、大きなビルも建設中で

あった。町の主要な交通機関はバイクで、市民の半数以上がバイクを所有している。交通量の多い都心部でも信号がなく、交差点を横断するのはバイクの運転手と阿吽の呼吸があるので、外国人は道路の横断はきわめて難しい。交通事故死はホーチミン市だけで一日で40人を超えると説明を受けて、その数の多さが納得できた。

ベトナムの人は北海道の雪にあこがれているが、寒くてベトナム人は北海道に住めないと思っている人が多いようである。しかし、一人でもベトナムの学生が本学に来たら、ベトナム留学生の間で北見の快適さが伝わり、留学生が増えるものと思う。



通訳のお手伝いしてくれた大学生

大韓民国三陟(サムチョク)大学校から訪問団が来学

(総務課)

去る12月4日(水)、本学と学術・教育交流協定関係にある三陟大学校から、金大寿(Kim Dae Soo)総長を始めとする4名の教職員が本学を訪れました。

両大学間の学術・教育交流協定及び学生交流に関する覚書は平成7年に締結され、これまで活発な交流活動が行われてきました。特に本学では三陟大学校から多くの留学生を受入れてきた実績があり、平成15年1月現在も2名の留学生が在籍しています。

今回の訪問では、常本学長を始めとする本学関係者と懇談が行われ、留学生交流を含む様々

な分野での交流を更に推進すべく、熱心な意見交換が行われました。



懇談風景(右から2人目:金総長)

＝諸報＝

放送大学との単位互換協定調印式

(教務課)

去る11月11日(月)、本学第1会議室において、放送大学との間で単位互換協定を締結し、調印式が行われました。両大学の関係者が見守る中、放送大学の丹保学長と本学の常本学長が相互に協定書に調印しました。

この協定により、本学学生は、平成15年度第1学期(平成15年4月1日から開始)から放送大学で開講されている既存の学問分野にとらわれない3コース、6専攻の授業科目を履修することにより、幅広い知識の修得等教育内容の充実を図ることが可能となり、多数の学生の受講が期待されています。

協定の調印式後、引き続き、関係者が附属図

書館2階の「放送大学授業視聴コーナー」及び「視聴覚室」の施設を見学しました。



協定書に署名する常本学長(右)と丹保学長(左)

国立大学法人会計基準セミナーの実施

(会計課)

本学では、11月21日から12月20日までの延べ10回にわたり、事務系職員を対象とした国立大学法人会計基準セミナーを実施しました。

このセミナーは、平成16年度から予定されている国立大学の独立行政法人化に伴い、本年8月に公表された「国立大学法人会計基準」(中間報告)を理解させることにより、独立行政法人化後の会計業務の円滑な遂行を図ることを目的に実施したものです。

研修は、監査法人から講師を招き、会計課職員を中心に21名の職員が受講しました。



北見工業大学永年勤務者表彰式

(総務課)

平成14年度北見工業大学永年勤務者表彰式が11月22日(金)午後4時から第1会議室において行われました。

本学永年勤務者表彰被表彰者に対し、学長から表彰状の授与並びに記念品の贈呈がありました。

引き続き祝賀会が開催され午後5時30分和やかなうち終了しました。

被表彰者は、次のとおりです。(50音順)

北見工業大学永年勤務者表彰

30年勤務者

氏名	所属学科等
大島 俊之	土木開発工学科
小野 勝巳	教 務 課
菅原 洋子	技 術 部
鈴木 輝之	土木開発工学科
林 義 男	電気電子工学科
福井 洋之	化学システム工学科
森 訓 保	土木開発工学科

20年勤務者

氏名	所属学科等
金崎 幸彦	附属図書館
信山 直紀	技 術 部
山崎 智之	土木開発工学科
山根 美佐雄	技 術 部

10年勤務者

氏名	所属学科等
榮坂 俊雄	情報システム工学科
佐藤 敏則	技 術 部
徳田 奨	技 術 部
長谷川 麻美	総 務 課
平山 浩一	電気電子工学科
南 尚 嗣	機器分析センター



F Dワークショップ及び講演会の開催

(教務課)

去る、11月29日、30日の両日にわたり、ファカルティ・ディベロップメントに関するワークショップを本年度も2部構成により実施しました。第1部は、29日午後から、本年5月に実施した「初任教員研修」に参加した2人の教官による「初任教員研修を受けて」というテーマで報告会が行われました。第2部は、第1部終了後、1泊2日の日程で課題により3班に分かれての分科会討論並びに分科会の報告会を実施し、それぞれにおいて活発な意見交換が行われました。

また、12月19日(木)には、「ファカルティ・ディベロップメント」企画の一環として、教職員を対象に(株)進研アド取締役 大学改革支援室長 遠山智一氏及び国公立大学室長 中村肖三氏を招いて「大学を取り巻く環境変化と改革について」(遠山氏)、「第三者(特に高校側)から見た北見工業大学」(中村氏)と題した講

演会を開催しました。両講師は、国立大学の現状及び今後想定される大学の問題点等について他大学及び本学の現状を引用しながらその問題点について講演しました。

参加した40余名は、現在置かれている大学の立場について、認識を新たにしました。



挨拶する高橋副学長

外国人研究者の受入れ

(総務課)

氏名 国籍・年齢	受入学科 職名・氏名	研究題目	受入期間
(モハマド モニール イスラム) Mohammad Monirul ISLAM バングラデシュ・37才	土木開発工学科 教授・佐渡 公明	NOAA, orbview2 衛星データを用いた水質モニタリング	H14.11.25 ~ H16.11.24

＝ 規程 ＝

北見工業大学タスクフォース設置要項

制 定 平成14年10月28日 学長裁定
一部改正 平成15年1月10日 学長裁定

(設置)

第1 本学戦略会議の検討等を踏まえ、本学における今後の戦略及び当面する諸課題に対応するため、学長の下に、北見工業大学タスクフォース(以下「タスクフォース」という。)を置く。

(組織)

第2 タスクフォースは、各関連ごとに、次のとおりとする。

(1) 大学評価、研究支援関連

- ① 教育評価対応タスクフォース
- ② 研究評価対応タスクフォース
- ③ 国際貢献評価タスクフォース
- ④ 知財戦略・地域貢献タスクフォース
- ⑤ 施設・設備戦略タスクフォース
- ⑥ 技術支援体制タスクフォース

(2) 教育関連

- ① JABEE 推進タスクフォース
- ② 入試システム検討タスクフォース

(3) 研究プロジェクト、広報関連

- ① プロジェクト構想タスクフォース
- ② 情報システム戦略タスクフォース
- ③ 広報支援タスクフォース

(構成員)

第3 各タスクフォースの構成員は、学長の指名する者若干人とする。

(総括責任者)

第4 タスクフォースの各関連ごとの総括担当者は、次のとおりとする。

- | | |
|------------------------------|----------------|
| (1) 大学評価、研究支援関連(第2(1)の①を除く。) | : 副学長(総務・研究担当) |
| (2) 教育関連(第2(1)の①を含む。) | : 副学長(教務・学生担当) |
| (3) 研究プロジェクト、広報関連 | : 附属図書館長 |

(責任者)

第5 各タスクフォースごとに、学長の指名する責任者を置く。

2 責任者は、会議を招集し議長となる。

(事務)

第6 会議の事務は、事務局各課等が連携して行う。

(雑則)

第7 この要項に定めるもののほか、タスクフォースの運営に必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

この要項は、平成14年10月28日から実施する。

附 則

この要項は、平成15年1月10日から実施する。

= 日誌 =

(総務課)

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 11月6日 | 総務委員会
地域共同研究センター第6回特別講演会 | 12月2日 | 第6回再編統合問題ワーキンググループ
入学試験実施委員会 |
| 7日 | 第5回再編統合問題ワーキンググループ
地域共同研究センター第7回特別講演会 | 4日 | 第9回独立行政法人化問題ワーキンググループ
産学連携推進員会議 |
| 8日 | 大学院専攻主任会議
人事委員会
第5回公開講座(～22日) | 6日 | 推薦入学試験
地域共同研究センター第8回特別講演会 |
| 11日 | 人事委員会
学生委員会
放送大学との単位互換協定調印式 | 7日 | リーダーシップトレーニングセミナー(～8日) |
| 12日 | 入学者選抜委員会
推薦入学者選抜実施委員会 | 9日 | 推薦入学者選抜実施委員会 |
| 17日 | 工業英語能力検定試験 | 10日 | 人事委員会 |
| 19日 | 附属図書館委員会 | 11日 | 総務委員会
大学院専攻主任会議
地域共同研究センター第9回特別講演会 |
| 20日 | 第654回教授会
第128回研究科委員会
第8回独立行政法人化問題ワーキンググループ | 13日 | 第6回運営諮問会議 |
| 22日 | 北見工業大学永年勤務者表彰 | 14日 | TOEIC IP |
| 28日 | 教務委員会
推薦入学者選抜実施委員会 | 16日 | 教務委員会 |
| 29日 | FD推進のためのワークショップ(～30日) | 17日 | 推薦入学者選抜実施委員会
入学者選抜委員会
附属図書館委員会 |
| | | 18日 | 第655回教授会
第129回研究科委員会
推薦入学合格発表 |
| | | 19日 | 地域共同研究センター第10回特別講演会
FDに関する特別講演会 |
| | | 20日 | 就職ガイダンス |
| | | 23日 | 4年次再試験(～26日) |
| | | 24日 | 冬季休業日(～1月17日) |
| | | 25日 | 第7回再編統合問題ワーキンググループ
第10回独立行政法人化問題ワーキンググループ |
| | | 27日 | 御用納め |

あなたの節電で地球温暖化防止と
新たな研究費が生まれます